

「文化」と「教養」のデフレーション

ここ20年ぐらいだろうか、文化人とか教養人とか言われていた人々の評判がすこぶる悪い。進歩的文化人とか朝日文化人とか岩波文化人とか言われていた人の評価はもうボロボロだ。今時、彼らを評価するようなことを言えばよほど頭の悪いやつだと思われる。ましてや、彼らの言動をまねて似たようなことを言ったり、彼らの価値観のままに自らを演じようとする評論家や芸能人など、彼らの亜流は今時の若者からすれば嘲笑の対象でしかない。時代とはそういうものだとは達観するしかないが、気の毒ではある。大江健三郎などは、良くも悪くも本物の文化人で、今でも、自分の言語を使って自分の価値観を語っているが、いかんせん彼は頭が悪くて日本語が不自由だ。多少とも論理的思考を身に着けた人間にとっては、彼の言動は支離滅裂だ。ある時代、あのようなものすごくへたくそな日本語がはやったのも不思議だが、私だって、よくわからない彼の文章を新鮮に感じたことはあったし、言語能力が極端に低い人の文章だと気が付いたのはだいぶ後のことだ。まあ、文学や思想・宗教などは、そんなものだといえばそれまでだ。

ところで、この文章は飛行機の中で、ベニー・カーターのバンドで歌うサラ・ヴォーンを聞きながら書いている。今ちょうど「恋に恋して」をうたっている。録音は1962年だ。我が家にテレビが入ったのはその2年後だった。まだ、手塚治虫も赤塚不二夫も現役で少年漫画を描いていた。私はこの時代が好きだ。思春期の時代を強く肯定的に思い返すのは老人の性かもしれない。

時代とともに文化や価値観は変わるものだから、今から見れば噴飯ものの意見がある時代の文化の主流の思想であったとしても別に不思議ではない。私も、彼らが再評価されることはこの先あり得ないと思っている。しかし、ある時代には知的文化の代表者であった人たちが、まるで無知の代表選手のように評価されるというのはあまりにも極端だ。彼らはもともと自己認知欲求の強い人たちだからつらいだろう。そういう同情は別として、価値観の変化の背景に何があったのかきちんと分析しておくべきかもしれない。あの時代の価値観から現在の価値観への変化を生み出したものが何かを具体的に考えることには、将来を考える上で意味がある。

かなり前から一定方向の変化があると思う。よくある説明は情報量の違いである。確かに、テレビの時代になって情報は質量ともに変わった。その後の、コンピュータや携帯電話とかスマートフォンとか、映像を含めた個人レベルでの情報の受信・発信技術の発達、情報のやり取りを質的・量的に変えた。社会が人と人とのつながりだとすれば、言語と情報は、社会をつないでいるいくつかのネットワークの中でもっとも重要なものだ。情報ネットワークの中では情報の上流も下流もなくなった。今や、政治家でさえツイッターで個人的に

情報を発信する。先日、テレビを見ていたら、不祥事を起こした政治家がフェースブックか何かでコメントを出したことについて、コメンテータが、フェースブックは一方的で、フェースブックを見ない人がいるから、公式会見をすべきだといっていた。聞いていて、このコメンテータはとんでもないそうつきだと思った。公式会見をしてもらいたいのはマスコミ関係者だ。公式会見は彼らのメシの種だ。この素材を適当に部分的に切り取って、彼らなりに演出して彼らなりの価値観で伝えるのが彼らの仕事だ。材料がなければ商売ができない。ただそれだけのことだ。ツイッターでもフェースブックでも、発信者が直接書いたものであれば本人の言葉だ。それに文句があるのならば、書き込みをしたりツイッターなりフェースブックなりで反対の意見を発表すればよい。情報の公平性という意味ではこちらの方が公平だ。少なくとも途中でバイアスかける人がいないので安心だ。しかし、こういう公平な情報網の中では、従来、情報を管理していた人間、もっと露骨に言えばバイアスをかけていた人の地位あるいは商売がなくなる。それだけのことだ。私は正直者だ。私がテレビのコメンテータならば、自分たちの商売が成り立つように会見をしてもらいたいというだろう。SNS ではだれでも情報の発信者になれるから企業もうっかりできない。先日もオーバーブッキングで飛行機会社が強引に飛行機から乗客を引きずりおろしたら、SNS 上でその映像が発信されて、飛行機会社が謝ることになった。

これが、情報量と情報の伝達の変化なのだが、これは、歴史的に一定の方向で変化している。言葉ができて細かい情報交換が可能になり、文字ができて情報が記録として残り、手紙ができて情報が広く拡散するようになった。電話ができてリアルタイムの情報交換ができるようになり、テレビができて映像がそのまま情報化され、コンピュータの発達で情報をネットワーク化した。こうしてみると、長い歴史の中で、情報テクノロジーの質的・量的変化の大きな方向が見えるだろう。そし、この変化は最近になってさらに急激に変化しつつある。この変化は、人と人をつなぐ他のネットワークの変化に比べて驚くほど速い。

しかし、これだけで分かった気になってはいけない。ある時代に、ある特定の人たちの意見あるいは文化が価値あるものあるいは正義として位置づけられたのか、そんなことがどうして可能だったのかという問題である。別にこれは、戦前の右翼とか戦後の左翼がどうだったかという問題ではない。情報の送信可能量が小さく、情報を抽象化して圧縮する必要があり、少量の限られた情報を、受信側・発信側という方向性が決められた中で、時間的な位相差を持ちながら伝えられた時代には、右翼だろうが左翼だろうが、権威づけられた文化や正義が存在しえた。リアルタイムで大量の情報が、方向性もなく交換される時代になると、どちらにしたって、頓珍漢な馬鹿野郎にしか思われぬ。大量の情報があると、何故、権威が嘲笑の対象にしかならないのかという問題を考えたい。

私は、人間の社会や思想は試行錯誤的に作られてきたのだと思っている。それは、現在の生

き物が、試行錯誤的に作られたのだという進化論の考え方に似ている。時に、ある環境に過度に適応してしまったために、他とつながりを持たない進化の袋小路に入ってしまうように、文化も展開の見えない袋小路に入ってしまうことがある（何とは言わないがある種の古典芸能）。そういうところも似ている。試行錯誤的に何かが決まっていくというのは自然な感覚だ。これが本来の形だと思う。歴史にあらかじめ予見可能な方向性があるという考え方は、何かの勘違いだと思う。ある方向に沿う考え方が正しいとされるのはヘーゲルあたりからなのだろうか、これはマルクスにも受け継がれている。もっとも、変化を生み出す動力という考え方がマルクスにはあって、その動力が下部構造・経済ということになっている。私は、マルクスが動力とした経済に代わって、情報を動力と考えろと主張しているのではない。今後、情報技術がどのように変わっていくのか、その技術に乗って伝達される情報がどのような内容になるのか、もっと別の動力が社会の変化をもたらすのかということは、私にはわからない。

不確実性（uncertainty）という議論がある。特に東北大震災以後。科学的な方法を使ってもすべてを予見することはできないという事実が今更ながら強調されている。私は科学者だから、科学の有効性を否定する気はない。科学や技術のベースには、試行錯誤・経験的認識がある。だから、日常生活の延長上に想定される変化に対しては、科学は有効に予測を立てることができる。しかし、めったに起きないことで、経験の範囲を超えた巨大なエネルギーが働く変化については、試行錯誤的な対応が不可能で、科学は無力だ。しかし、もともと生き物とはそういうものだ。すべてが予見可能だと考える方がおかしい。

かつて、情報へのアクセスが限られ権威も政治的力もない一般の庶民にとって。身の回りで起こる変化は、そのほとんどが、外生的に与えられる予見不可能な変化ととらえられていた。彼らは、可能な限りの情報網を張り巡らしてはいたろうが、その範囲は極めて限られていた。そこで、何が起こるかわからないと、おびえながら、少しずつ試行錯誤的に行動していた。その一方で、いつも疑いを持って時代の変化を眺めて、変化に過度に適応することも避けていた。「何事も、ほどほどに」という感覚である。それは、彼らの知恵なのだ。

一方、文化人や教養人は、揺るぎのない真実として方向性をもった「正義」が確信できた。おどおどと、おびえながら生きている庶民にしてみれば、彼らは力強く魅力的に見えただろう。しかし、その「正義」をどのように実現するか、その「正義」が現実存在する人々を本当に幸福にするのかどうかは、試行錯誤的にやってみなければわからない。また、実際それが実現したとしても、揺れ動く外的な変化にたまたま適応的だということに過ぎない。そう考えると「正義」に進むべき正しい方向というような意味はない。これが真実であるならば、いわゆる思想や正義を語る人は、物を知らないアホということになる。ここで、無知なる無名の庶民は、知恵ある高名な教養人や文化人を馬鹿にする権利を得る。

情報や環境の揺れ動きは、時間的・空間的に一様ではない。だから、どこかで適応的である「正義」も場所や時間が違えば不適応だ。時空間的な広がりの中で、どこでも適応できる「正義」などないだろう。多くの情報が広くすばやく拡散すれば、「正義」もどこかで不適応だ。こういうことはすぐにばれてしまう。当然、「正義」を主張した人間の薄っぺらさも人前にさらされる。教養人や文化人でない一般の人はこのこと（物事の本質「正義は、とりあえず今の成り立っているに過ぎない」）を知っている。だから、教養人や文化人より賢いことになる。利いた風な「正義」を口にする文化人や教養人が今や馬鹿にされる存在だというのは、こういう時代的背景からだろう。

ところで、コンピュータの棋士が負ける時代が来た。このことから、人間の作るセオリーがコンピュータの作るセオリーに負ける時代になったと捉える人がいる。だがこれは違う。詳しいことは知らないが、コンピュータ囲碁は機械学習によって、より勝つ確率の高い着手を選択している。セオリーを選択しているのではない。理論分析・構築能力に負けたのではなくて、機械の持つ学習能力に負けるのだ。学習能力や計算速度では、人はコンピュータに勝てない。この頃は、囲碁のコンピューター・システム同志の対戦もある。当然、勝敗が付く。その結果をもとに、事後的に何故そのような結果になったかという分析はできる。その結果、新しいセオリーが生まれてくるだろう。これは人間のやる作業だ。そして、新たなセオリーは、当面しばらくは有効だ。

我が国の伝統である「ものづくり」を大切にしろという主張がある。「ものづくり」の源流である我が国の職人仕事は、試行錯誤の繰り返しによって磨かれた技術である。理論的追及もないわけではないが、基本的には、あきらめずに様々なことを試みた結果として生まれる技術だ。試行錯誤によって理論が生まれ、試行錯誤によって理論の正当性が検証される。時に試行錯誤によって、前の理論が修正される。様々なことを試行錯誤的に繰り返さなければ、適応や進化は生まれない。「ものづくり」教育と工学教育 (engineering education) は違う。こういうことがわかっていて「ものづくり」を大切にしろと言っているのか疑わしい。

「歴史に学べ」と声高に説教する輩がいる。しかし、何を言っているのか解って言っているのだろうか。確かに「歴史に学ぶ」ことは大切だ。これは機械学習と同じ意味で大切なのだ。何をしたらどうなったのかという経験を蓄積することは次の判断のために重要だ。だが、時代の結果、今を歴史の必然の流れの結果であり、その結果を正義として、それ以前を誤り、不正義として否定すべきもの、学ぶ価値のないものと考えすることは、情報の集積の価値を知らない愚か者の思考だ。というか、これは古代国家のやり方だ。前の王朝はそれに代わった王朝によって全否定される。前の時代も、試行錯誤的な適応の結果として作られたものであり、そこには多くの成功や失敗が蓄積されているのだ。別にどこの国とは言わないが、その

国の大統領なり大統領候補なり、こういうことがわかっていて「歴史に学べ」と言っているのだろうか。私には典型的な馬鹿に見える。こういう馬鹿を馬鹿と見抜けない国民もまた知恵がない。

(20191226)